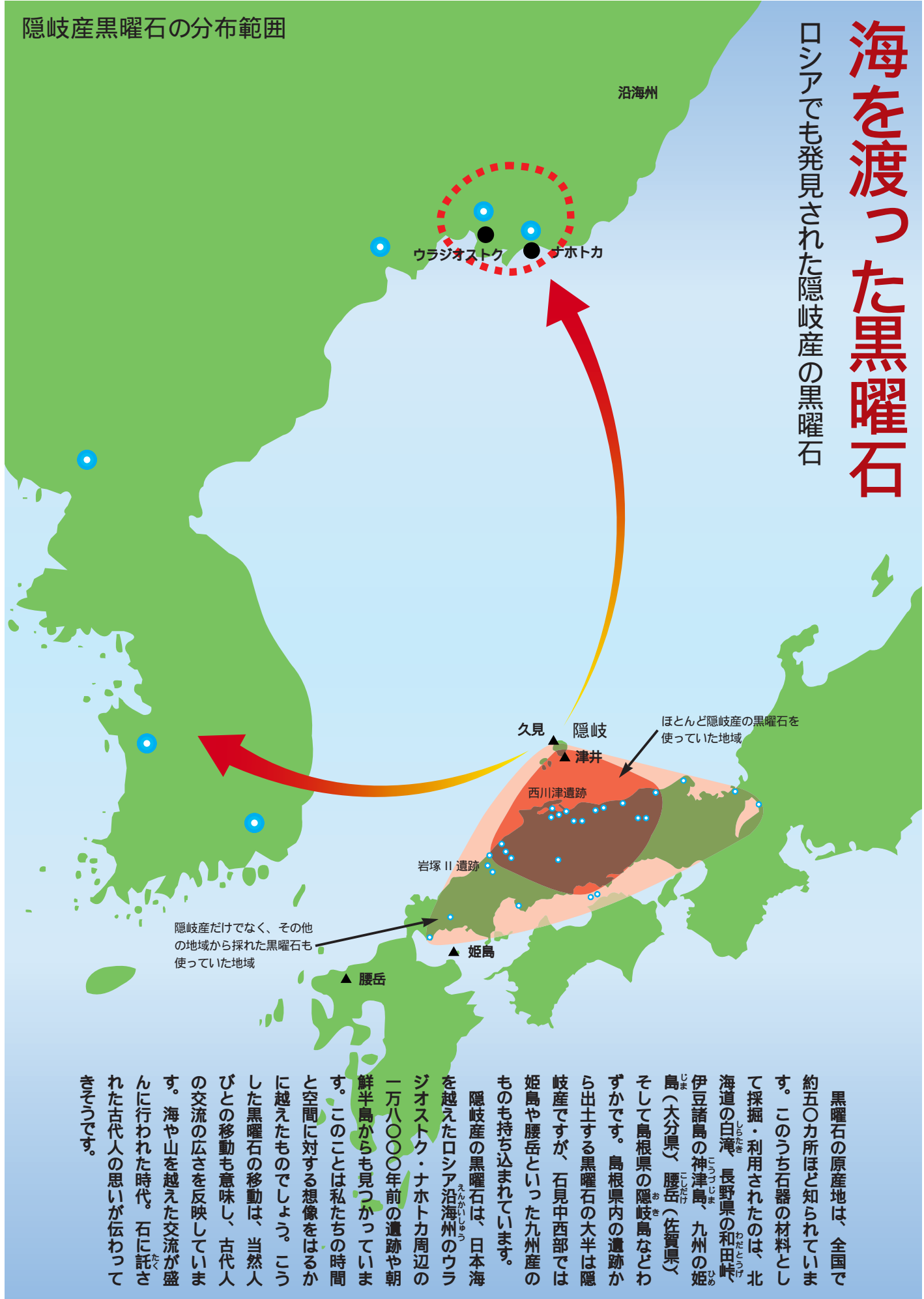


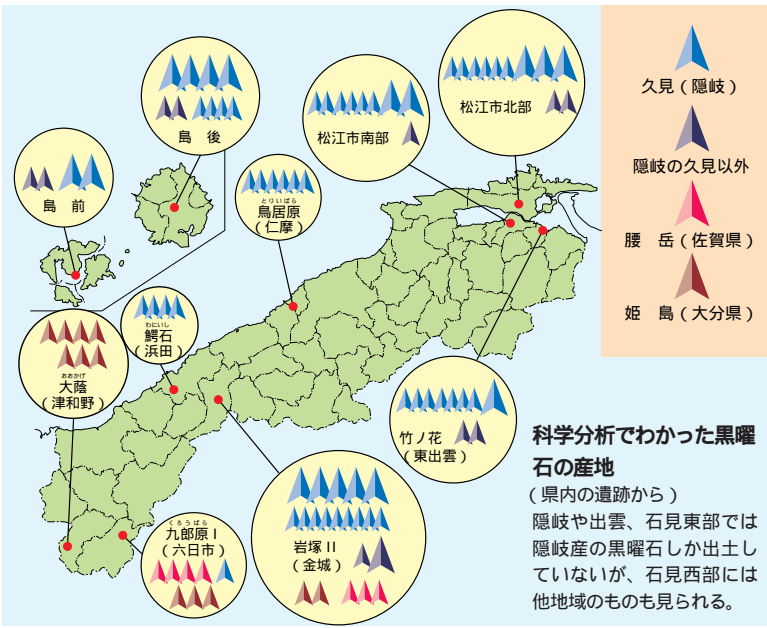
# 海を渡った黒曜石

ロシアでも発見された隠岐産の黒曜石



## 黒曜石ルートを追え

全国で五〇カ所ある黒曜石の産地のうち、どこで採れた石がどの土地へ運ばれているのかを突き止めるのは、簡単なことではありません。黒曜石の産地は肉眼ではほとんど区別がつかませんが、蛍光X線分析法という科学のメスを当てることで、現在大きな成果が上がりつつあります。黒曜石の成分は、産地によって違います。そこで蛍光X線分析法を使ってそれぞれの成分を分析したカルテを作成し、遺跡出土品のデータのどれに当てはまるか、一点ずつ検証して産地を突きとめていくのです。「ついで」の遠くなる作業によって、黒曜石がどこからどこへ渡ったか、その謎が徐々に解き明かされていきます。この謎が明らかになれば、この時代の古代人の交流がどのようなものだったのかを知る手がかりにもなるでしょう。



## 県内の遺跡から

黒曜石製の道具は、島根県内の縄文時代の遺跡調査で必ずと言っていいほど出土する遺物です。同じ石器の材料であるサヌカイト(安山岩の一種)に比べてすぐ目につきやすいことも確かですが、やはり隠岐に近いことから、島根県は黒曜石の一大消費地であったのでしょう。



西川津遺跡 (松江市西川津町)  
県内でもっとも多くの黒曜石の石器や破片を出土している遺跡。縄文時代前期を中心とする土器が鹿・イノシシの骨とともに多量に見つかっており、古代人の台所の様子が浮かび上がっている



岩塚II遺跡 (金城町今福)  
山間部にある縄文時代前期から後期の遺跡。ここから、隠岐産と九州の姫島産の両方の黒曜石を使って石器を製作していたと考えられる場所が見つかった。

## 丸木舟 日本海を渡る

一九八二年七月二十四日、知夫里島の郡港から一隻のボートが発航しました。船の名前は「からむしII世」。船の大きさは、長さ八・二メートル、幅六四センチ、重さ約一トンの五人乗り。大きな大木をくりぬいて造られた、いわゆる丸木舟です。めざすは本土、五〇キロ先にある八束郡の美保関町七瀬港……。

隠岐と本州を古代人はどうして渡ったのか、この疑問に答えるため、松江市の小学校の教師を中心に「からむし会」を結成、丸木舟で日本海を渡るという大実験が行われたのです。船には実際に黒曜石一五キロを積み込み、一三人で交代しながら、一二時間四三分をかけて渡り切りました。黒曜石を積んだ丸木舟が隠岐から本土まで渡れるということを、まさに身をもって証明したのです。



丸木舟をこぐ「からむし会」のメンバー  
当日の天候は曇りで、波の高さは三メートルもあり、決して良好とは言えないものでした。天気がもっと好条件で、かつ漕ぎ手に丸木舟をあやつる経験が豊富であれば、さらに短時間で渡れるかもしれません。考古学者が検証できないこうした謎に、情熱ある人たちが挑戦し、答えを見いだしました。



隠岐郷土館に展示されているからむしII世号